

関根達人著

『中近世の蝦夷地と北方交易』

―アイヌ文化と内国化―

浪川 健治

本書は、著者関根達人氏が精力的に研究を進められてきた北方史に関わる近世考古学を中心とした論考からなっている。具体的には、序章の冒頭で「本書は、中世・近世の多様な考古資料と文献史料の双方から、津軽海峡や宗谷海峡を越えたヒト・モノ・情報の実態を明らかにし、歴史上「蝦夷地」と呼ばれた北海道島・カラフト（サハリン）島・千島（クリル）へ和人がいついかなる形で進出したか、和人や和産物（日本製品）の蝦夷地進出がアイヌ文化の形成と変容にどのような影響を与えたか、蝦夷地の内国化がどのような形で進出したかなどについて論じる」と述べられている。

こうしたことから、氏も研究史の整理において指摘されるように北海道・東北史研究会による北方史研究の基軸の提起を引き継いでいるように受け止められる。しかしながら、本書の独創的な視点は、これらについて日本史あるいはアイヌ史としてではなく、むしろ現在の地理概念とは異なる広域的な「蝦夷地史」概念によって地域と民族の歴史を語るうとすることにある。本書の構成は次の通りである。

序章 北方史とアイヌ文化

1 はじめに

2 問題の所在

3 本書の構成

第I章 北方交易に関する考古学的研究

1 アイヌ文化成立以前の北方交易―北日本出土の鏡をめぐって

2 考古資料からみたアイヌ文化の成立

3 アイヌの宝物とツクナイ

4 副葬品からみたアイヌ文化の変容

5 シベチャリ出土の遺物

6 タマサイ・ガラス玉に関する基礎的研究

第II章 本州アイヌの実像

1 考古学的痕跡

2 生業・習俗と北奥社会

3 狩猟と漁撈

第III章 和人の北方進出と蝦夷地の内国化

1 道南和人館とその時代

2 北海道島における中世陶磁器の流通

3 近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化

4 石造物からみた蝦夷地の内国化

5 松前三湊の墓石と人口動態

第IV章 カラフト（サハリン）島への和人の進出

1 カラフト島出土の日本製品

2 白主会所跡の位置と構造

3 死亡者からみたカラフト島への和人の進出

4 1800年代のカラフト島の先住民族と国家

終章 蝦夷地史の構築を目指して

5 クシュンコタン占拠事件と樺太アイヌ供養・顕彰碑

1 「蝦夷地史」研究の提唱と実践

2 北方交易と蝦夷地内国化の歴史

第1章 北方交易に関する考古学的研究のうち、1 「アイヌ文化成立以前の北方交易」では、アイヌ文化成立以前の北方交易を擦文文化に伴う銅鏡から10世紀〜12世紀の北方交易の具体像を述べる。2 「考古資料からみたアイヌ文化の成立」はアイヌの物質文化を通じたエスニシテイの形成を述べる。3 「アイヌの宝物とツクナイ」は、埋納やツクナイ（償い）からアイヌの刀や刀装具の意味を論ずる。4 「副葬品からみたアイヌ文化の変容」はアイヌ墓の副葬品を分析、一六六九年のシヤクシヤインの戦い以後、急速な和人の経済的支配の強化を推定する。5 「シベチャリ出土の遺物」は、シヤクシヤインの本拠地シベチャリチャシ周辺出土遺物から日高アイヌの豊富な日本製品の保持を論ずる。6 「タマサイ・ガラス玉に関する基礎的研究」は、出土品と伝世品の編年から和人の蝦夷地進出よりタマサイが華美化・形式化したとする。本章は、北海道アイヌの物質文化を特徴づける漆器や太刀・刀装具、甲冑、ガラス玉など宝物類に着目し、移入品としての北方交易の歴史の変遷を追っている。

第2章 本州アイヌの実像のうち、1 「考古学的痕跡」は、青森県内の中近世遺跡から出土した骨角器・ガラス玉・蝦夷拵の刀装具類を、2 「生業・習俗と北奥社会」では本州アイヌの考古学的痕跡と文献史料の対比から生業や習俗を検討する。3 「狩猟と漁撈」は、本州アイヌのアワビ漁・海獣猟・熊猟から、北海道アイヌとの関係性を論ずる。本章

は青森県内の出土資料による本州アイヌの考古学からの実態解明である。

第3章 和人の北方進出と蝦夷地の内国化のうち、1 「道南和人館とその時代」は渡島半島の中世城館跡の曲輪配置と規模を比較、下之国安東氏による道南の戦国的様相を述べる。2 「北海道島における中世陶磁器の流通」は、出土中世陶磁器の集成と流通の時期的変遷を検討、矢不來館跡の存続年代を確定している。3 「近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化」は同じく陶磁器流通の時期的変遷から和人の進出とアイヌとの関係を論じる。4 「石造物からみた蝦夷地の内国化」では、道内近世石造物の悉皆調査から和人の進出の実態と内国化の過程を追う。5 「松前三湊の墓石と人口動態」は近世墓標の悉皆調査と史料から松前三湊の人口変遷を導き出す。本章は石造物の分析による津軽海峡を越えた和人の経済的・宗教的・政治的進出状況―蝦夷地内国化の過程の考察である。

第4章 カラフト（サハリン）島への和人の進出では、弘前大学とサハリン大学考古学・民族誌研究所ならびにサハリン州立郷土誌博物館の協力による調査成果が1 「カラフト島出土の日本製品」と2 「自主会所跡の位置と構造」に示されている。1では日本製品の樺太アイヌやニブフへの受容状況を明らかにし、2はカラフト（サハリン）の拠点であった自主会所が日本式の庭園を備え、幕府役人の接待やオムシャなどにふさわしい施設であったとする。3 「死亡者からみたカラフト島への和人の進出」は、「自主村墓所并死亡人取調書上」から近世カラフト（サハリン）島への和人の進出状況、樺太・千島交換条約の締結に先立つ招魂所・墓所の整備を検討する。4 「1850年代のカラフト島の先住民族と国家」は、「北海道暦検図」の分析を中心に、1850年代の樺太アイヌやニブフなどの先住民族の居住状況と日本・ロシアの進出状況を述べる。

5 「クシユンコタン占拠事件と樺太アイヌ供養・顕彰碑」は、北海道松前町での近世墓標調査で発見した樺太アイヌ供養・顕彰碑から、一八五三年のクシユンコタン占拠事件をめぐる樺太アイヌと近世国家の社会的関係を論じる。本章は、カラフト（サハリン）における日本製品の流通と、宗谷海峡を越えた和人の進出を論じる。

終章 蝦夷地史の構築を目指して のうち、1 「蝦夷地史」研究の提唱と実践」は、蝦夷地の歴史をaアイヌを含む北方民族と和人により営まれた歴史、b中国・ロシアとの関係に形成された歴史という二面から捉えた、アイヌ考古学と中世・近世考古学の融合が不可欠とする。2 「北方交易と蝦夷地内国化の歴史」では、1で「経済的な内国化」を政治的なそれに先行するとして、蝦夷地の歴史を初期アイヌ文化期（13〜15世紀前半）、中期アイヌ文化期（15世紀後半〜17世紀後葉）、後期アイヌ文化期（17世紀末葉〜18世紀末葉）、蝦夷地の内国化とアイヌ民族に対する国民化政策が進められた段階（19世紀初頭以降）という時期区分を示す。

このように、本書は考古学を基盤とした「蝦夷地史」の通時的な論考である。そして、「蝦夷地史」の提起にみられる、これまでの北方史の枠を越える野心的な分析視角と歴史概念の提示であることは疑いない。本書は、その点において卓越した意義をもつものと評価される。勿論そのことは、本書の提示がさらに深化さるべき余地があることと矛盾するものではない。例えば、氏は「蝦夷地史」をアイヌ考古学と中近世考古学との融合として位置づけるが、本書においても同時期の文献史料の利用について氏も積極的に取り組まれているのであり、それをも含み込んだ総合学としての位置づけこそふさわしいことは明らかであろう。

関根氏の内国化の理解に示されるように、本書に結実した研究の出発点が、本州アイヌの研究にあることは見落とすことができない。アイヌに触れた研究者のなかには、本州アイヌは例外的な存在として記述することも稀ではない。しかし、その存在が国家・地域との間にもった意味とそれを研究することの意義については、ハーバード大学のデビッド・ハウエル氏も、一九九二年に筆者がまとめた『近世日本と北方社会』（三省堂）に触れる形で本州アイヌを弘前藩の藩政のみならず、近世日本の身分制度にまでつなげるものとして位置づける（David L. Howell, 2014, "Is Ainu History Japanese History?" In *Beyond Ainu Studies*. 108p. UNIVERSITY of HAWAII PRESS.）。そうした本州アイヌが藩権力との間に形づくった諸関係を、中世から近世にいたる過程のなかに位置づけて、北海道・サハリンへと視点を広げ、「蝦夷地史」を構想した成果が本書であるといえよう。

氏が述べられた和人を対象とした中近世考古学とアイヌ考古学との融合としての「蝦夷地史」の提起は、文献史学からのこの分野への新たな発言をも促すものである。そのための基礎作業としては、二〇〇一年に刊行された『青森県史 資料編近世1』で、この時点で把握されていた本州アイヌ関係史料はほぼ網羅されている。今後は、本書の提起と視角の提示に触発されながら、新たな北東アジアのなかに民族と地域、国家を位置づけた研究としての「蝦夷地史」が深められることを期待したい。

（A4判、四〇七頁、吉川弘文館、二〇一四年一〇月、

本体価格一万五千円＋税）

（なみかわ・けんじ 筑波大学人文社会系教授）